

神話としての弓と禪

山田 奨 治

1 はじめに

弓道という言葉の響きの中に、精神修養とか禪との密接な関係を連想する人は少なくあるまい。「弓道は精神統一になる」「弓道は禪に似ている」といった類の言葉をよく聞く。ところが弓道史を振り返ってみると、弓道がことさら禪と結びつけられるようになったのは、実は戦後のことであるといつて過言ではない。さらに限定するならば、ドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲル（一八八四～一九五五）が書いた『弓と禪』という本が日本で翻訳出版された、一九五六年以後の現象といえることができる。『弓と禪』は、一九四八年にドイツ語で出版され、その後英語、日本語、ポルトガル語に翻訳され、今なお版を重ねている日本文化論のベストセラーである。

それでは、以前の弓道はどのようなものであったかという点、明

治以後に限っていえば体育のため、あるいは楽しみのため、というのが大勢であった。戦前の弓道書には、一部のセクト(1)のものを除いても、禪との関連はほとんど出てこない。翻って現代弓道の現状をみると、弓道を禅修行の一環としている実践家は、日本国内においてはごく例外的な存在である。それにもかかわらず、弓と禪との結びつきが強調されるにいたった背後には、どのような事情があったのか。

ここに一九八三年に筑波大学弓道研究室が行った、ひとつの調査結果を示す（表1）。西ドイツの弓道実践家百三十一名に、弓道を始めた動機についてたずねたものである。「精神修養のため」という人が、全体の八十四パーセントをしめている。また「禅への興味」が約六十一パーセント、「ヘリゲルの『弓と禪』を読んで」が約四十九パーセントである。日本人の調査結果はないが、筆者の実

表1 西ドイツ弓道家(百三十一名)の弓道を始めた動機
(複数回答可)

精神修養のため	(八四・〇%)
日本文化への興味	(六六・四%)
禅への興味	(六一・一%)
美しい姿勢を身につける	(五四・二%)
ヘリゲルの『弓と禅』を読んで	(四八・九%)

(一九八三年、筑波大学弓道研究室調査)

感では日本人の弓道実践家は、禅との関係をさかんに語りながらも、実際には体育のため、あるいは楽しみのために弓道をやっている人がほとんどのように思う。この日独弓道家の意識差に、ヘリゲルの書物が関与している可能性は捨てきれない。

ヘリゲルについては、多くの論者による言及がある。⁽²⁾ いずれの論においても、ヘリゲルと彼の師である阿波研造(二八八〇〜一九三九)との、神秘的なエピソードが繰り返して語られている。それらのほとんどは、ヘリゲルを全面的に肯定し、ヘリゲルの解釈が日本弓道——ひいては日本の芸道——を論じる出発点となっている。はたして日本の弓道、芸道を語るのに、ヘリゲルを出発点として良いのであろうか。

ヘリゲルの師であった阿波が、エキセントリックな指導者であったことは、弓道研究者の間ではよく知られているところである。他方で、弓道専門家以外の論者による論考の多くは、ヘリゲルが紹介

した有り様を日本の弓道と理解している。無論、弓道論ではなく日本文化論、あるいはひとつの物語として見た場合、ヘリゲルの著作は極めて特異で興味深い。当時の日本における禅宗ブームを反映しているのだともいえる。しかし、現実の弓道とヘリゲルの紹介した弓道との、ある種の乖離を思うとき、ヘリゲルの経験を外国人の異文化見聞として、そのまま受け止めることには消極的にならざるをえない。

この論文では、ヘリゲルのテキストやその周辺資料を読み直し、再構成することによって、いかにして『弓と禅』の神話が析出され、いったかを明らかにしたい。

なお、以降では多分に現代的な香りのする「弓道」の言葉は使わず、ヘリゲルの用語にあわせて「弓術」に統一することにする。

2 弓術略史

ヘリゲルの話題に入る前に、日本弓術史の概略を予備知識として概観する。周知の通り、弓は太古から狩猟の道具として使われてきたもので、縄文時代の遺跡から丸木の弓や大量の石鏃が出土している。

日本の弓の特徴は、長さが二メートル以上もある長弓であるという点と、弓幹の中央よりも下を握って使用することの二点である。特に、弓を握る位置が弓幹の中央よりも下にあるというのは、日本

の弓に特有のことである。日本の弓の使用法に関する古い記録としては、国宝に指定されている伝香川県出土銅鐸の様相がある。そこには鹿を狙う射手が描かれており、その射手は弓幹の中央よりも下を握っているように見える。また、文字で記録されたものとしては、有名な『魏志倭人伝』に「兵用矛楯木弓木弓短下長上」とあり、当時から弓幹の下部を握っていたことがうかがわれる。

弓矢を武器として使用するようになったのは、弥生時代以後であるといわれている。弥生時代に鏃が大型化していることや、矢の刺さった人骨の出土などが、その根拠とされている。時代が下がるにしたがって、源頼政の鶴退治や、源為朝の強弓が物語を彩り、源平合戦にいたって武器としての弓矢は花盛りを迎える。

しかし、今日につながる流派弓術の祖の出現は、応仁の乱を待たなければならぬ。応仁の乱の時に、京の市街戦で技を磨き、その後各地で弓矢を教えて回った人物に、日置弾正正次がある。日置弾正には架空人物説があり、その実在については、まだ結論をみていない。

さて、日置弾正は、彼が会得した精妙なる射術を吉田重賢・重政親子に伝授する。吉田親子のあたりから、伝承を文書の上でたどることが出来る。彼らの伝えた流派はその後日置流と呼ばれ、日置流は印西派、雪荷派、道雪派、左近衛門派、大蔵派などに分派して、今日でもいくつかの地方にその伝承が残っている。また吉田家菩提

寺の祈願僧に、竹林坊如成という弓の上手な僧侶があり、彼が創始した日置流竹林派がある。これは日置流を冠してはいるが、日置弾正との直接のつながりはない、というのが通説になっている。

代表的な弓の流派には、この他に小笠原流がある。小笠原流は、鎌倉時代始めの小笠原長清にはじまる弓馬礼法であり、弓の有職故実的な面と、騎射を得意とする流派である。小笠原の弓法は、室町期に入っていったん中絶する。その間、小笠原家はいくつにも分家し、江戸時代には小笠原を名乗る家は、大名家だけでも五家あった。八代將軍吉宗は、全国に伝わる弓術書を献上させ、旗本であった小笠原平兵衛常春に、その内容の研究と中絶していた騎射、故実の復元を命じた。この小笠原平兵衛が、現存する東京の小笠原流の直接の祖とされている。

以上が弓術流派の概略である。日本の弓術を技術面から分類するならば、礼射と武射に分けられる。礼射は弓の儀式的ないし呪術的な側面で、この方面は小笠原流の独壇場といって過言ではない。武射はさらに歩射、騎射、堂射に分類できる。

歩射は、歩兵の戦場における射術を指す。これは矢が十分な威力を発揮できる射程距離である三十メートル内外の距離において、自らの生死がかかった状況下で、鎧を貫くほどの貫徹力を与えつつ必中の矢を発射する技術である。歩射の伝承では、精緻な技を尽くすことと、死線を乗り越える高度の精神的要素が訓練の中心となって

いる。歩射を専門とした流派に、日置流印西派がある。

騎射は馬上から弓を射る技術を指す。戦場での騎射の実体がどのようなものであったかは定かではないが、現在の流鏑馬や、犬追物の文献から推定するに、騎射は弓を持ったまま馬を巧みに操作して標的との距離を縮め、射あてるのにさほど苦勞をしない距離にまで追いつめつつ矢を射かける技術であったと考えられる。したがって、騎射では弓を持った姿勢での馬の操作ということが、訓練の中心となる。騎射は小笠原流、武田流で行われてきた。

最後の堂射は、通矢競技に特化した技術である。通矢は江戸時代に盛んに行われた競技で、京都蓮華王院三十三間堂の軒下、長さ百二十メートル、高さ五メートルの空間を一昼夜通して矢を射かけ、軒下を何本射通すことができたかを競ったものである。堂射で必要となってくるのは、軽い矢を低い弾道で、かつ少ない疲労で飛ばす技術である。堂射では矢の貫徹力は要求されない分、その技術は歩射とは相当異なる。また堂射にはスポーツ、ないしは見せ物的な要素が多分にあり、戦場を基本とする歩射、騎射とは精神的な側面においても異質のものであったといえる。堂射に熱心に取り組んだ流派に、日置流竹林派、日置流雪荷派がある。

歩射は、射距離二十八メートルの空間を弓道場の基本構造とすることによって、また騎射は、流鏑馬という形で現在まで維持された。それに対して堂射は、幕末に衰退してしまい、三十三間堂上では競

技が行われなくなってしまう。明治期の堂射は、堂上という空間を失い、その射術と精神の伝承は行き場をなくす、危機的な混乱状況にあったといえる。ヘリゲルの師であった阿波は、堂射系の日置流雪荷派・木村辰五郎と、やはり堂射を専門としていた尾州竹林派・本多利実から弓術を学んだ。また竹林派の流祖は僧侶であったことから、同派の教えには仏教の影響が色濃く残っている。堂射の特質と、当時の堂射が置かれていた状況を知ることが、阿波を理解する上で重要な手がかりとなる。

3 阿波研造と大射道教

さて、話を少しずつヘリゲルに近づけよう。ヘリゲルに弓術を教えた阿波研造という人物の生涯を、簡単に追っておく。阿波の生涯については、櫻井保之助による『阿波研造―大いなる射の道⁽³⁾の教』という大著がある。この書は、阿波の生誕百年を記念して発行されたものである。出版の性格上、バイアスのない書物とはいえないが、阿波の研究書としてはこれに並ぶものはない。阿波の人となり語るのに、生誕地・石巻地方の地勢や棲息動物を語り、親潮と黒潮の海洋エネルギーが阿波を生んだかのような叙述にいささか辟易の感はあるが、豊富な一次資料に基づく論考は、阿波の実像を知る多くの手がかりを与えてくれる。本節では、櫻井の記述を参考にしながら、阿波の生涯をまとめることにする。

阿波は一八八〇年（明治十三年）、宮城県河北町で麴屋を営んでいた佐藤家の長男として生まれた。学校教育は小学校だけであったが、十八歳のころに漢学の私塾を開いている。そこで何を教えていたかは不明である。二十歳の時に、石巻で同じ麴屋業を営んでいた阿波家の入婿となって阿波家を継いだ。石巻で雪荷派弓術を教えていた旧藩士、木村辰五郎に入門して弓術を始めたのは二十一歳の時であった。阿波は弓術の上達が相当早く、わずか二年ほどで木村から雪荷派の免許皆伝を受けた。そして二十三歳の時に、自宅近くに自分の道場を開設している。

一九〇九年（明治四十二年）、三十歳の時に仙台に出て新しい弓術道場を開き、一九一〇年（明治四十三年）、当時東大弓術部師範であった本多利実の門を叩いた。ほぼ同じ時期に、阿波は二高弓術部の師範に就任している。このころの阿波は百発百中に近かったらしく、二高の学生に対しても的中を重視した指導をしていたようである。ところが大正のはじめころになると、自分の弓術に疑問を持ち始める。そして、雪荷派伝書にある「なんにもいらぬ」という教えに深く共鳴し、弓術を否定し始めた。

雪荷派の「なんにもいらぬ」の教えは、『吉田豊要答書』という伝書に出てくるもので、そこには次のようなことが書かれている。「縦へ足踏、胴造り、弓構、手の内、かけ、打起し、弦道、箭束、延詰、概へ、強弱、張合、村雨、朝嵐、なんにもいらぬと見申候」

つまり、諸々の技はなんにもいらぬんだと説いている。ところが、この伝書にはそれに続けて次のようなことが書かれてある。「此いらぬハ始から不入にてハ無之候。初何をも不存、とつと初心の時ハ先足踏みをならわねハ胴腰か定り不申候」つまり吉田豊要は、最初にまず射術を習いなさい、そしてそれに十分習熟すれば、意識しなくても自然にできるようなのだ、ということを教えているのである。ところが阿波はそれを、最初から技はなんにもいらぬんだ、と拡大解釈していることがわかる。

「なんにもいらぬ」を誤解した阿波は、弓術を「一種の技巧的試練を能とした遺伝病」とし、「人間学を修める修行」としての「射道」を説きはじめた。それがために、弓術界からは狂人扱いされ、伝統弓術が根強いところに出向くとうしろから石を投げられたこともあった。本多利実の孫で、のちに本多流宗家を継いだ本多利時は、研造の射風を酷評して気分だけで引いているといい、本多門下での兄弟弟子にあたる大平善蔵は、阿波が後に説いた「一射絶命」の教えを、ただ死ぬまで頑張れなどというのは馬鹿げたことだとい⁽⁵⁾った。このように、阿波に対する本多門下からの評価は散々である。

阿波が「弓術から射道へ」を説いた背景には、嘉納治五郎の講道館柔道の成功があった。阿波は遺稿ノートの中で、「其処で一番近く例を挙げれば、今の嘉納治五郎氏の講道館柔道が、我が日本は勿論諸外国迄にも賞揚せられるのも、是れ道として一流一派に拘泥せ

ず、各派の長所を採りたるところに発する」と述べている。⁽⁶⁾つまり、嘉納による柔術から柔道への転換に触発されて、「弓術から射道へ」の着想を得たのである。

一九二〇年（大正九年）、四十一歳の時に阿波は、決定的にエキセントリックな体験をする。櫻井の言葉を借りるならば、阿波は「大爆発」を経験する。櫻井はその体験を、阿波のいくつかの短文や図を手がかりにして、次のように表現している。

ある深夜、家族も寝静まり、四周は寂として音なく、月が穏やかに夜の闇を照らすのをみるだけである。研造は独り道場に入り、愛用の弓矢とともに静かに的に前に進んだ。

決意があった。

肉体が先に滅びるか、精神が生き残るか。

無発。統一。

一歩たりとも退かぬ覚悟の射であった。

苦闘が続く。肉体は既にその限界を越えた。わがいのちもここに究まる。

遂に滅びた。

と思ったとき、天来の妙音が響いた。

天来と思ったのは、これまで自分にも耳にしたことのない、もっとも澄明で、もっとも高く強い弦音であり的中音であった。

聞いたと思ったと同じ瞬間、自己は粉微塵に消し飛んで、目も弦くもむ五彩の中、天地宇宙に轟々たる大波紋が充滿した。⁽⁷⁾

こういった一種の神秘体験は、各種の宗教の原点になっていることが多い。例えば空海が室戸岬で修行中に、明けの明星が口の中に飛び込んだという話と、体験としては類似している。

「大爆発」の後、阿波は彼の教えの中心となってくる、「一射絶命」「射裡見性」を唱え始める。「一射絶命」「射裡見性」の正体については、「自然力というものの心気の鍛錬、そして靈気の発動が求められる。かくして相対を絶した絶対道に入る。空間を滅しそこを通過する。そしてはじめて仏陀の光明につつまれ、仏陀の光明を映発している自己を発見することができる。そのとき自己は自己にして自己にあらず⁽⁸⁾」と櫻井は解説している。「見性」は禅語ではあるが、阿波の教えに禅の要素は、ほとんど感じることができない。意外なことに阿波自身が禅に参じたことは、生涯に一度も無かったようである。阿波の生涯を克明に調査した櫻井も、「研造は、禅僧についての事実⁽⁹⁾は認められない」と述べている。また、「研造は弓禅一味もいい、またとくに大乘仏教哲理の表現も射道に用いたが、無条件に禅を評価していたのではなかった⁽¹⁰⁾」とも述べている。

では、なぜヘリゲルは、阿波の教えを禅に結びつけたのか。そこへ議論を進める前に、阿波の生涯を最後まで追っておこう。ヘリゲ

ルが阿波に入門したのは、「大爆発」の翌年、後に述べる「大射道教」設立を提唱して二高生や東北帝大生の猛反対にあう前年のことであった。阿波は一九二七年（昭和二年）、四十八歳の時に、二高生の大反対を押し切って「大射道教」という名の団体を設立する。その後の二高生は、「弓は宗教」「開祖は阿波研造先生」「先生が地方に巡回指導するを、単に稽古とか、教授とか云わずへ布教」と云って居る」と証言しており、大射道教がはっきりと宗教としての性格を持っていたことがわかる。

しかし大射道教設立の翌年、阿波は病に倒れ、一旦奇跡的に回復するも、それ以後は亡くなるまで半病人のような状態であった。そして一九三九年（昭和十四年）、阿波は六十歳で病没している。

今日でも大射道教の流れを引く阿波の孫弟子、曾孫弟子にあたる弓道家は大勢あるが、宗教的な団体としての大射道教は、阿波の死去と同時に消滅してしまっただけで差し支えない。

4 ヘリゲル、阿波と出会う

さて、いよいよ『弓と禪』の著者、オイゲン・ヘリゲルに話題を移すことにする。ヘリゲルは、一八八四年（明治十七年）にハイデルベルク近くで生を受けた。ハイデルベルク大学でははじめ神学を学び、のちに転じて哲学を学んだ。学問的には新カント学派に属していた。ヘリゲルは、学生時代から「不思議な衝動に駆られてのよ

うに、熱心に神秘説を研究していた⁽¹²⁾。その神秘説とは、マイスター・エックハルト（一二六〇頃〜一三二七）のドイツ神秘主義思想のことである。その結果、彼自身が神秘的宗教にもっとも近いと考えた禪に関心を持ち、ひいては日本に関心を持ったと思われる。ヘリゲルは一九二四年（大正十三年）に東北帝国大学に招かれて来日し、一九二九年（昭和四年）までそこで哲学の教鞭をとった。帰国後はエルランゲン大学教授に就任し、一九五一年（昭和二十六年）に退職、そして一九五五年（昭和三十年）に七十一歳でこの世を去っている。

ヘリゲル来日の背景に禪への関心があったことについて、『弓と禪』には、つぎのような記述がある。

一たい日本のいろいろな芸術が、その内面的形式において、結局ひとつの共通な根源すなわち仏教に遡るといふ事は、吾々ヨーロッパ人にすら可成り以前から、もはや何らの秘密でもなくなっている。

（中略）

勿論此処に仏教といっても、只単なる仏教を意味しているのではない。表面上近づき易い文献の故に、それだけがヨーロッパで知られており、又人々が之を理解する事をすら要求されている、あの明白に思弁的な仏教の事を云っているのではなく、

日本で「禅」と呼ばれているディアナ・ブディスムス（禅宗）を指しているのである⁽¹³⁾。

「日本のすべての芸術は禅に遡る」という言説に、違和感を感じない者はあるまい。この考えは、鈴木大拙に影響されたものであることは、『日本の弓術』に出てくるつぎの一文からわかる。

例えば鈴木大拙氏はその著『禅論集』の中で、日本文化と禅とはきわめて緊密な関係にあること、日本のいろいろな術、武士の精神的態度、日本人の生活様式、道徳的・実践的ならびに美的方面はおろか、ある程度までは知的方面においてさえ、日本人の生活態度は、その根底をなす禅を無視してはまったく理解することが不可能だということを、証明しようとしている⁽¹⁴⁾。

ここから看破できることは、鈴木大拙に影響されたヘリゲルは、彼自身が「神秘への憧憬⁽¹⁵⁾」と表現しているように、日本文化の中に可能な限り禅的要素を見いだそうとしていたことである。ヘリゲルは来日の意図について、つぎのように述べている。

何ゆえ私が他ならぬこの弓術を習おうと企てたかは、一往の説明を要する。すでに学生のころから私は神秘説、わけてもド

イツの神秘説を詳しく調べていた。ところがその際、これを完全に理解するためには自分には何か欠けていることを悟った。それは、私にはどうしても現われて来そうになく、またどこにもその解決の道が見いだしえない究極のものであった。私は最後の門の前に立ち、しかも開くべき鍵を持っていないような気がした。そんなわけで私は、東北帝国大学に数年間勤める意向はないかという問合わせを受けた時、日本およびその驚嘆すべき民族を知る機会を喜んで迎えた。それによって生きた仏教に接する見込みが立ち、かつその接触によって、マイスター・エックハルトがあのように称揚しながらそれに至る道を示さなかった「離繫」の本質について多少詳しいことが、あるいは分かるかも知れないと考えるだけでも、それは私にとって嬉しいことであった⁽¹⁶⁾。

来日後のヘリゲルが、禅を激しく希求するにいたったひとつのエピソードを引用しておく。在日当初のある日、日本人の同僚とホテルで待ち合わせをしている最中に地震が起き、多くの客が階段やエレベーターに殺到した。

地震だ！ 数年前の大地震の記憶が今だに人々の脳裏に生々しく焼きついていた。かく言う私も、戸外に飛び出そうとした

一人であった。もちろん歓談中の同僚にも、早く出るよう急かすつもりだった。ところが驚ろいたことに、その同僚は、腕を組んだまま、目を半眼にして、まるで何事も起こらなかつたかのように、身じろぎもせず坐っていた。それは、ぐずぐずと何かを躊躇ったり、まだ決断しかねている者の姿ではなかつた。むしろ、あれこれと迷わずに、当然のことを当然のごとく行なっている者の、もしくは行なわれない者の姿であつた。

(中略)

数日後、私は、この日本人の同僚が禅仏教者であることを知り、あの時、彼は極度の禅定に入ることによって《不動》でいられたのだということを、それとなく察知したのである。

ところで私は——漠然とした想像の域を脱していたとは言いがたいけれども——それ以前に、すでに何冊かの禅書を読みもし、多くのことを見聞していた。しかし、禅に接触したいという、それまでの単なる願望は（その願望が、日本に行くという決断を容易にしてくれたのだが）、この決定的な体験を機に、直ちに禅に接近し、禅をもっとつぶさに観察しようという意志へと一変した。⁽¹⁷⁾

ヘリゲルは、ある日本人に禅を学びたいと相談をもちかけた。相談を受けた日本人は、この日本語に決して堪能ではない異邦人に対

して、「とりあえず最初は、とくに禅に強い影響をうけた芸道を選んで、それを修行しながら、ゆっくりと回り道をして禅に接近せよ」⁽¹⁸⁾とアドバイスをした。そこでヘリゲルは弓術を習うために、当時東北帝大弓術部の師範であつた阿波の門を叩いた。弓術を選んだ理由は、彼には射撃の経験があり、それが役に立つのではないかと考えたからである。

ヘリゲルが日本滞在中に禅そのものに参じたという記録は、どこにも存在しない。しかしながら、ヘリゲルは『禅の道』という遺稿集を残しており、それを見るかぎりにおいては、禅についての研究を相当行なつていたと思われる。

ヘリゲルは、東北帝大の同僚であつた小町谷操三を通して、阿波への入門を願ひ出た。小町谷は二高生時代に、阿波の最初の門下生であつた。ヘリゲルも小町谷も、一九二三年（大正十二年）に東北帝大に設置された法文学部の教官として、一九二四年（大正十三年）に招かれた。櫻井は、「（小町谷は）ただ研造とは十二年ぶりの再会であり、この段階で研造のその後の心境の進展と変化を知る由もなかつた」⁽¹⁹⁾と述べている。小町谷はヘリゲルに請われるままに、阿波にヘリゲルの入門を仲介した。そのあたりの事情を小町谷は、つぎのように振り返っている。

大正十五年の春ごろだったと思う。ヘリゲル君が訪ねて来て、

弓を稽古したいから、阿波先生に紹介してくれと言った。弓は日本人でも取りつきにくいものである。それを、どういうわけですら、ヘリゲル君の言うには、自分は今もう日本へ来て三年になる。そうして日本の文化について学ぶべきものがあることが、ようやくわかって来た。殊に日本人の思想には、仏教、なかなか禅宗の影響が非常にあるように見える。これを知る捷徑は、弓道を学ぶにしくはないと思う。⁽²⁰⁾

しかし阿波は最初、ヘリゲルの願い出を断った。以前外国人を教えたときに、面白くないことがあったというのがその理由であった。その後の小町谷の説得により、小町谷が通訳に責任を持つことを条件に、阿波はヘリゲルの指導を承諾した。かくしてヘリゲルは、阿波から週一回の弓術の指導を受けるようになった。ヘリゲルが弓術を合理的に理解しようとするのに対して、阿波は合理を超えた言葉で彼に対した。この西洋文化と日本文化の対話は、それだけとってみればとても面白く、ヘリゲルの著作が文学的に大成功を収めた大きな理由となっている。しかし、ヘリゲル自身は合理主義者というよりも、エックハルトに心酔する性向を持つ神秘主義者と理解するのが妥当であろう。

弓を宗教にしようとしていた阿波と、阿波の特異性を知る由もな

かったヘリゲル。決して禅を肯定していたわけではなかった阿波と、禅的なるものを求めてやまなかったヘリゲル。この両者の対話の実像は、如何なるものであったのか、それを検証することなしに、ヘリゲルのテキストを論じることができない。

そこで検証の題材として、『日本の弓術』『弓と禅』の中で神秘的にして感動的なふたつの場面を取り出し、それらのエピソードの再検討を企てたい。第一は「暗闇の的」のエピソード、第二は阿波の指導の根幹である「それが射る」という教えについてである。

5 神秘的なるものの検証1 — 暗闇の的

第一のエピソード「暗闇の的」がどのようなものだったかを、『日本の弓術』での記述をもとに簡単に述べておく。ヘリゲルが三年間の巻藁での練習の後で、初めてのの前に立って弓を引くことを許されたとき、何度やっても矢が的に届かなかった。どうやったら的中させることができるのか、と聞いたところ、阿波は「的中を考えることは邪道であるから、的を狙うな」と教える。ヘリゲルは「狙わないで的に当てることはできない」と納得しない。そこで阿波は、夜に道場に来るように命じる。

私たちは先生の家の横にある広い道場に入った。先生は編針のように細長い一本の蚊取線香に火をともし、それを塚の中

ほどにある的の前の砂に立てた。それから私たちは射る場所へ来た。先生は光をまともに受けて立っているので、まばゆいほど明るく見える。しかし的はまっ暗なところにあり、蚊取線香の微かに光る一点は非常に小さいので、なかなかそのありかが分からないくらいである。先生は先刻から一語も発せず、自分の弓と二本の矢を執った。第一の矢が射られた。発止という音で、命中したことが分かった。第二の矢も音を立てて打ちこまれた。先生は私を促して、射られた二本の矢をあらためさせた。第一の矢はみごとの的のまん中に立ち、第二の矢は第一の矢の筈に中たってそれを二つに割っていた。私はそれを元の場所へ持って来た。先生はそれを見て考えこんでいたが、やがて次のように言われた。⁽²¹⁾

「暗い夜の道場で、師匠が一人の弟子のために模範を見せる。ほとんど見えないほどの的に向かって矢を放って、それが的に命中し、第二の矢は的の心に刺さっている矢の筈に命中してそれを割く——この話には誰しも感動を覚えるであろう。」

しかし、感動に流されて、事の本質を見失うことのないよう、この出来事の「稀さ」を、あえて数量的な手法で検証してみたい。阿波が当時、どの程度の的中率を持っていたかは不明であるが、百発百中に近かったと仮定して、的中率を統計学でいうシグマにあた

る九九・七パーセントの正規分布とする。直径三十八センチメートルの標準的に直径八ミリメートルの矢を射かけるとして、的中率九九・七パーセントの射手が一本目の矢の筈に二本目の矢を当てることのできる確率を、コンピュータ・シミュレーションで求めてみた。二射を十萬回シミュレートしてみた結果、矢筈を壊す確率は〇・三%となった。「暗闇的」のエピソードは、統計学的にみても確かに稀な出来事であるといえる。

しかし、弓術家間の共通理解では、矢筈を壊してしまうことは自分の道具を壊してしまうという、恥ずべき失敗なのである。「暗闇的」のエピソードは、弓術家として決して自慢げに話してよいことではない。ヘリゲルは、「先生はそれを見て考えこんでいた」と書いている。阿波は心中、「しまった、お気に入りの矢を壊してしまった」とでも思っていたのかもしれない。事実、阿波自身はこのエピソードを、一人の高弟以外の誰にも話していない。阿波は矢筈を壊したことを、恥ずべきこととして口外したくなかったのだと考えるのは、邪推に過ぎるだろうか。

小町谷は、「暗闇的」のエピソードについて、次のように証言している。

彼の講演を読んだ後に、この出来事について、ある日阿波先生にうかがったところ、先生は、「いやまったく不思議なこと

があるものです。偶然にも、ああいうことが起こったのです」と言って笑って居られた⁽²²⁾。

また、阿波がこのエピソードを明かした唯一人の高弟である安沢平次郎は、阿波自身はつぎのように語ったと述べている。

「あの時、礼射をやったんだ。甲矢が中って、乙矢がターッと
いう何かにブツッかった様な音がした。それからあと、オイゲン
さんがいくら経っても帰ってこないんだ。オイゲンさんオイ
ゲンさんって呼んだ」と云うんだ。「何だ、返事しない」とい
うんだ。

それからまあオイゲンさんの前にちゃんと坐っている。
先生がこうやってそば行つて（このこ出掛ける格好）「どうし
たんだ」と云うと、声も出さずにオイゲンさん凍てついた様に
坐っている。そしてそのまま矢を抜かずに持つてきた。

（中略）

先生は、「いや、あれはただの偶然だよ」、「こんなこと別
おれはして見せたつもりでもねえんだ」と云うんだ。⁽²³⁾

これは阿波が安沢に語った言葉である。極めて平易でわかりやす
い。要するに、あれは偶然だったということだ。ここには神秘の香

りは微塵もない。ところが阿波がヘリゲルに語ったとされる言葉は、
これとはまったく雰囲気異なっている。

——「私はこの道場で三十年も稽古をしていて暗い時でも的
がどの辺にあるかは分かっているはずだから、一本目の矢が的
のまん中に中たつたのはさほど見事な出来ばえでもない、あ
なたは考えられるであろう。それだけならばいかにももつとも
かも知れない。しかし二本目の矢はどう見られるか。これは私
から出たのでもなければ、私が中てたのでもない。そこで、こ
んな暗さで一体狙うことができるものか、よく考えてごらんな
さい。それでもまだあなたは、狙わずには中てられぬと言ひ張
られるか。まあ私たちは、的の前では仏陀の前に頭を下げる時
と同じ気持ちになろうではありませんか⁽²⁴⁾」——

これは極めて難解で神秘的な言葉である。阿波が安沢に語った言
葉と、ヘリゲルに語ったとされる言葉の落差はいったい何なのか。
そこに立ち現れてくるのは、通訳の問題である。ヘリゲルは普段、
小町谷の通訳を介して阿波の指導を受けていた。しかし「暗闇の
的」の時には、阿波とヘリゲルは二人きりであった。小町谷は次の
ように証言している。

ヘリゲル君の講演の中に、阿波先生がまっくらやみの中で、
 的に前に線香をともして射た二本の矢のうち、乙矢が甲矢の筈
 に当たったこと、その時に先生が説いた話しのことがある。その
 晩には、私は通訳に行かなかったから、ヘリゲル君は、自分の
 日本語の理解力を頼りに、以心伝心で、実に驚くべきことであ
 るが、あれだけのことを理解したのだと思う。⁽²⁵⁾

阿波とヘリゲルの間に、その時何語でどのようなやりとりがあっ
 たのかは、今となってはわからない。しかし阿波が通じぬ言葉で、
 この偶然の出来事を苦心して説明しようとしたであろうことは、容
 易に想像がつく。

二本目の矢が前の矢の矢筈に命中するという、偶然的事象の空間
 が生み出された。そこに通訳不在という状況が重なった。「暗闇の
 的」のエピソードにおいて、極めて稀な出来事が起こったという、
 その偶然に神秘を認めよというならば、それも良いであろう。しか
 し、そこに仏陀を持ち出すことは、いたずらに神秘を増幅させる効
 果しかなかった。

6 神秘的なるものの検証2 —それが射る

次に第二のエピソード、「それが射る」の教えの検討に移る。本
 題に入る前に、通訳の問題について整理しておこう。ヘリゲルと阿

波の間には、常に通訳として小町谷が介在していた。阿波は「大爆
 発」以後、難解な言葉を多用するようになっていた。小町谷は、つ
 ぎのように述懐している。

先生はまた、稽古ごとに、弓道が術に非ずして精神修養の手
 段であり、悟道の方法であることを説いた。そして実に即興詩
 人の如く、禅的な警句を随所に、自由自在に使った。そしても
 どかしくなると、たちまち道場の壁間に掛けてある黒板に、い
 ろいろな図を書いて、ヘリゲル君に理解せしめようとした。あ
 る日なぞは、円の上に立って弓を引いている人形を書き、人形
 の臍下と円の中心とを結び付け、この人形すなわちヘリゲル君
 は、丹田に力を入れて無我の境に入り、宇宙と一体となるべき
 ものである、と説明したこともあった。⁽²⁶⁾

櫻井は、「筆者らは、曾って阿波研造の教えが深遠で理解に苦し
 み、先輩の〈通訳〉によって師の教えを模索しながら、辛うじて稽
 古に励んだ」といい、阿波の文章を「論理の面では厳密でないこと
 とくに長文のものに論旨の一貫性に欠ける点があることである」と
 評している。⁽²⁷⁾

難解な講義を別としても、小町谷の必ずしも適切でない通訳の一
 例がある。

したがって弓術を實際に支えている根底は、底なしと言って
いくらい無限に深いのである。あるいは、日本の弓術の先生
方の間でよく通じる言葉を用いて言うならば、弓を射る時には
「不動の中心」となることに一切が懸かっている⁽²⁸⁾。

ヘリゲルの記述とは反対に、「不動の中心」は弓術の先生の間で
は、はっきりとは意味が通じない用語である⁽²⁹⁾。小町谷は、難解な阿
波の言葉を曲げて通訳したことについても、つぎのように明快に証
言している。

もつとも、時には、先生が先に教えておいたことと、矛盾す
るようなことを言われる場合も相当あった。しかし私はそうい
う時には、ヘリゲル君に通訳しないで黙っていた。そうすると
ヘリゲル君は不思議に思つて、先生はいまなんと言われたか、
と熱心に問いかけるので、私はしばしばまったく当惑した。そ
うしてすまないとは思つたが、「なあに、先生はいま説明に非
常に熱中しておられるだけで、いつもの一射絶命、百発聖射の
ことを繰り返しているんだよ」と言つて、その場をつくらつて
しまった。つまり先生は、弓道の精神を説いているうちに、お
のづから興が湧いて来て、なんとかして自分の気持ちを書いて現

わしたいために、いろいろな禪語を使い、そのうち無意識のな
かに、矛盾したことを話されたのであつて、私の握り潰し戦法
は、先生からもヘリゲル君からも、許してもらへることであつ
たと、今でも思つている⁽³⁰⁾。

小町谷は半ば、確信犯として阿波の矛盾した言葉を握り潰し、意
訳をしていたのである。しかし、一方的に小町谷を非難するのは酷
であろう。

的が私と一体になるならば、それは私が仏陀と一体になるこ
とを意味する。そして私が仏陀と一体になれば、矢は有と非有
の不動の中心に、したがつてまた的の中心に在ることになる。
矢が中心に在る——これをわれわれの目覚めた意識をもつて解
釈すれば、矢は中心から出て中心に入るのである。それゆえあ
なたは的を狙わずに自分自身を狙いなさい。するとあなたはあ
なた自身と仏陀と的とを同時に射中てます⁽³¹⁾。

このような、阿波特有の意味不明な言説を通訳する者の身になつ
て考えれば、意識は決して悪意によるものではない。小町谷は後に
東北大学で国際法の教授になるほどの人物であつて、外交的なセン
スと配慮を持っていたのだと理解すべきである。

さて、本題の「それが射る」の教えの分析に入ろう。「それが射る」の教えについて、簡単にまとめておくことにする。ヘリゲルが何度やっても巧く矢を射放せない時に、阿波に尋ねた。

「一体射というものはどうして放される事が出来ましょうか。若し『私が』しなければ」と。

「『それ』が射るのです」と彼は答えた。

(中略)

「ではこの『それ』とは誰ですか。何ですか」

「一度これがお分りになった暁には、貴方はもはや私を必要としません。そして若し私が、あなた自身の経験を省いて、之を探り出す助けを仕様と思うならば、私はあらゆる教師の中で最悪のものとなり、教師仲間から追放されるに値するでしょう。ですからもうその話はやめて、稽古しましょう。」

ヘリゲルは、この教えになやみながら稽古を続けた。そしてある日のこと、ヘリゲルが一射すると、阿波は丁重にお辞儀をして稽古を中断させた。ヘリゲルが面食らって阿波をまじまじと見てみると、阿波は「今し方『それ』が射ました」と叫んだ。そして、「やっと彼の云う意味がのみ込めた時、私は急にこみ上げてくる嬉しさを抑える事が出来なかつた」とヘリゲルは歓喜する。⁽³³⁾

このエピソードは、『弓と禪』全体の中心となる感動的な部分である。しかし、われわれは少し立ち止まって考えるべきである。「それが射る」とは何なのか。

筆者は「それが射る」の教えについて、次の二つの疑問点を提起する。第一に、阿波がヘリゲル以外の弟子に対して「それが射る」と教えた形跡がない。第二に、「それが射る」という言葉が、『弓と禪』の草稿ともいえる『日本の弓術』には一切出てこない。

第一の点については、阿波研究の決定版ともいえる櫻井の研究書を通読する限りにおいて、「それが射る」がヘリゲルとの関係においてしか出てこないことによって裏付けられる。第二の点については、「暗闇的」の同じ場面の記述で、『日本の弓術』では登場しなかつた「それ」が、『弓と禪』では登場する。『日本の弓術』では、つぎのように表現されている。

しかし二本目の矢はどう見られるか。これは私から出たのもなければ、私が中てたのでもない。そこで、こんな暗さで一体狙うことができるものか、よく考えてごらん下さい。それでもまだあなたは、狙わずには中てられぬと言ひ張られるか。まあ私たちは、的の前では仏陀の前に頭を下げる時と同じ気持ちになろうではありませんか。⁽²⁴⁾

これが、『弓と禪』では、つぎのように変わっている。

併し甲矢に中たった乙矢——之をどう考えられますか。とにかく私は、この射の功は「私」に帰せられるべきものでない事を知っています。「それ」が射たのです。そして中てたのです。仏陀の前でのように、この的に向かって頭を下げようではありませんか。³⁴

これらの疑問点に対する仮説として、つぎの二つが考えられる。

一 「それが射る」が、『弓と禪』におけるヘリゲルの創作であった。

二 「それが射る」をめぐって、阿波とヘリゲルの間になんらかのコミュニケーション上の行き違いがあった。

まず、第一の仮説を検討する。「それが射る」がヘリゲルの創作であったとするならば、『日本の弓術』から『弓と禪』までの十数年の間に創作したということになる。第一仮説に対しては、『日本の弓術』は元来講演として行われたもので、あまり高度な内容には踏み込まなかった、あるいはヘリゲル自身「それ」についての解釈をまとめきれなかったのだと反論できる。また、ヘリゲルは

『弓と禪』の序文の中で、「本書の叙述において、私の師匠が直接語らなかつた言葉は、一言も記さず、又彼が用いなかつた如何なる比喩や比較も用いなかつた」⁽³⁵⁾と宣言している。この宣言は信頼できるものとして、第一仮説は捨ててよいだろう。しかし、すでに述べたように、阿波とヘリゲルの間には小町谷という通訳が介在しており、その通訳の正確さには疑問がある。ヘリゲルが記録している言葉は、阿波が発した言葉とは異なるかと理解しなければならない。だが、それはヘリゲルの責任ではない。

つぎに、第二の仮説の可能性について考えてみる。西尾幹二は、「それが射ました」(Es geschossen.) について、「阿波師範が実際にかの日本語に三人称代名詞を語ったのか、ヘリゲル自身が語られたならないが、「それ」に当たるドイツ語の三人称代名詞³⁶は、自我を超え出たものを表現する非人称代名詞である」と指摘している。⁽³⁶⁾これに関して、ドイツ弓道連盟の会長であったフェリクス・ホフは、日本語の「それでした」が「Es geschossen.」と訳されたのではないかとこの仮説を提示している。「それでした」は日本語では、弟子が良いパフォーマンスを見せたときに使うに無理のない言葉で、単に「いまのはよかった」という意味になる。だが、ヘリゲルにはそれが「Es geschossen.」として通訳された。それがために、「それ」という自我を超え出た何かが射るといふ形に意味が変化したのでは

ないか、というのである。⁽³⁷⁾

筆者はホフ説を支持するものであるが、「それ」の解釈をめぐってヘリゲルの苦悩があったと考える。「それ」に一切触れなかった『日本の弓術』から「それ」を中心に据えた『弓と禪』の発表までに、戦争をはさんだとはいえ十余年の歳月を要したことが、それを物語っているように思う。『弓と禪』の序文にあるつぎの一文が、それを裏付けている。

しかしながらその時、過ぎ去った十年間に——それは私にとってたえまない練磨の十年を意味するのであるが——内面的に一段の進歩をとげ、以前よりも更に上達して、一層充実した態度で、この「神秘的な」弓道の中心問題を述べる事が出来るといふ確信を抱いていた私は、この際新に書き下ろしの著作を公にする事を決心したのである。⁽³⁸⁾

良い射を示した時に阿波が叫んだ言葉が「それでした」であったとするならば、その意味は、その道に熟達した者にしか理解できない、感性的な「良さ」をいう。文脈から考えると、阿波が最初に「それが射ました」とほめた時期は、ヘリゲルはまだ正規の的を射ることを許される前の巻藁練習の段階であった。初心者域を出ないこの時期において、自我を超え出た何かというほどに高度に精神

的な状態を指す「それ」が出現するとは、到底考えられないのである。阿波は、「いまのはよかったよ」とほめただけだったと考えるほうが、はるかに自然である。

しかし、ヘリゲルは「それ」の正体について、次のような結論に到達した。

弓射の場合に「それ」が狙い、中てると云われねばならないように、此処でも亦自我の代わりに「それ」が入って来て、自我が意識的な努力で自己のものとした能力や技倆を駆使するのである。そしてこの場合でも亦その「それ」とは、決して人々が理解し得るものでも、又追い求めて獲得出来るものでもなく、只之を経験した人へのみ明らかとなる或るものにつけた名前に過ぎないのである。⁽³⁹⁾

「それでした」が「それが射ました」と通訳されてしまった。ヘリゲルは、「それ」を自我を超え出た何かと理解してしまった。だとすると、「それが射ました」という教えは、日本語がドイツ語に通訳された時の、その一瞬の意味のずれによって生じた空間に、別の意味が充足されて生まれたのだといえる。

7 おわりに

ヘリゲルは六年間の日本滞在にもかかわらず、最後まで日本文化をいかかぶっていた面がある。例えば、「術と言えば、日本人はだれでも、少なくとも一つの術を修得して、生涯これを行っている、と言ふことができる」⁽⁴⁰⁾といった大袈裟な表現や、「日本の弓術家には、弓と矢の使用法に関して、本当に中絶したことは一度もない古い立派な伝統に頼りうるという便益がある」⁽⁴¹⁾といった誤解が散見できる⁽⁴²⁾。また、櫻井はつぎのように述べている。

研造は弓禪一致の表現を用いている。しかし、禪にいたる道として、弓道や射道を説いたものではない。ヘリゲルのこの理解はしかし、日本人のうちにも同様の理解が多く見られる現状では、彼を責めるわけにはいかない。むしろ、日本の芸道と禪との差を明らかにしなかった日本の学者こそ責められるべきである⁽⁴³⁾。

ヘリゲルの著作で根幹をなすふたつのエピソードに、あえて解釈を与えるならば、「暗闇の的」では偶然によって生み出された象徴の空間に、「それが射る」では、通訳の過程で生じた意味のずれの空間に、空虚な記号が発生したのである。ロラン・バルトは、こう

いった空虚性が神話作用の源泉になると述べている。この空虚な空間に意味を呼び込ませるのは、個人の意図や社会のイデオロギーであり、その働きが神話作用である。『弓と禪』においては、弓術の中に禪的なものを見いだそうとしたヘリゲル個人の意図が、神話を生み出した。

日本の弓術にはもともと禪的な要素がなかったのかといえは、そういうわけではない。岡山池田藩に伝わる日置流印西派の弓目録には、「弓はやくいて能所の事」という箇条がある。この目録の成立は、江戸初期にまで遡れることが確かめられている。そこには、「殺人弓活人弓の事、無門関にいう所の殺人刀活人剣の事」とあり、「殺人刀、活人剣、真言家の仏説に之有る由。其の理を取りて殺人弓と号すのみ。幸死即生、必生即死の理皆同じ事なり。心の動き、危ぶみ迷う間は殺人弓也。身を捨て命を軽んじ一矢射るを活人弓という也」⁽⁴⁴⁾と書かれている。ここには確かに禪の影響が入っている。しかしこの目録でいっていることは、武人の心意気を示しているもので、阿波―ヘリゲルにつながるものは何もない。

『弓と禪』は、当時の鈴木大拙ブームとも関連しながら、世界のベストセラーになった。かくして、『弓と禪』はひとつの神話として、世界中を闊歩しはじめた。一九五三年（昭和二十八年）に『弓と禪』に共感した八十三歳の鈴木大拙が、六十九歳のヘリゲルを訪ねてニューヨークからドイツに赴いている。ヘリゲルは、『弓と禪』の翻

訳者のひとり、稲富栄次郎にたいして「ついこの間、ニューヨークから鈴木大拙博士が来られて、一日大いに談じたが大変愉快であった⁽⁴⁵⁾」と語っている。

『弓と禪』は、今なおベストセラーをつづけている。日本語版は、「日本語→ドイツ語→日本語」という翻訳過程で、阿波の言葉の原型をとどめないほどに形を変えて伝わり、今なお多くの人々に弓道に対する一定の見方を与え続けている。この論文の目的は、ヘリゲルの著作と周辺資料を別の角度から読み直すことによって、「日本的なるもの」が創出されていった神話作用を明確化することにあつた。またそれは同時に、『弓と禪』がこれまでほとんど無批判に読まれてきたことへの、ささやかな抗論の試みでもあつた。

筆者の構想では、『弓と禪』に関する論及はまだ第一段階のものである。つぎの段階として、外国人の日本理解、なかならず弓術への俗解を与えた『弓と禪』の特異性を究明するために、『弓と禪』と同時期にやはり外国人によって記録された日本の弓術に関するテクストを対置し、内容を比較検討する必要がある。また、ヘリゲルがドイツ国内で行った『日本の弓術』の講演を、ナチズムの嵐が吹き荒れていた一九三六年ベルリンという時代背景において定位置をおす必要がある。さらには『日本の弓術』を戦後にリメイクした『弓と禪』が広く受け入れられ、阿波→ヘリゲルの弓術思想が伝統的なものと錯覚されて、日本に逆輸入、伝播されていったプロセス

を追わなければならない。続編は、また稿を改めて詳記したい。

註

引用文献の表記は、原則として常用漢字、現代かなづかいに準拠した。

- (1) 例えば、自らを「射仏」と名乗った大平善藏は、一九二三年に「大日本射覚院」を設立し、「射禅見性」を唱えた。
- (2) 大森曹玄「禅と弓道―ヘリゲル博士の〈弓と禅〉」『現代弓道講座』第六卷 一九八二年、西尾幹二「和魂洋魂―無心」『日本経済新聞』一九七八年四月十一日号、源了圓「武道の自然観―阿波研造の場合」『日本人の自然観』河出書房新社 一九九五年など。
- (3) 櫻井保之助『阿波研造―大いなる射の道の教』阿波研造先生生誕百年祭実行委員会 一九八一年。
- (4) これらはみな、弓術のテクニカルタームである。
- (5) 櫻井前掲書、一六二頁。
- (6) 櫻井前掲書、一四五頁。
- (7) 櫻井前掲書、一五九―一六〇頁。
- (8) 櫻井前掲書、一六四頁。
- (9) 櫻井前掲書、二二三頁。
- (10) 櫻井前掲書、二六六頁。
- (11) 櫻井前掲書、二一〇―二一一頁。
- (12) オイゲン・ヘリゲル（稲富栄次郎、上田武訳）『弓と禪』協同出版 一九五六年（以後『弓と禪』）、五六頁。

- (13) 『弓と禪』、四四―四五頁。
- (14) オイゲン・ヘリゲル(柴田治三郎訳)『日本の弓術』岩波文庫一九八二年(以後『弓術』文庫版)、一六一―一七頁。
- (15) 『弓と禪』、五九頁。
- (16) 『弓術』文庫版、二二―二四頁。
- (17) 榎木真吉「ヘリゲル小伝」(オイゲン・ヘリゲル(榎木真吉訳)『禪の道』講談社学術文庫 所収 一九九一年)、二〇〇―二〇一頁。
- (18) 榎木前掲書、二〇二頁。
- (19) 櫻井前掲書、二八五頁。
- (20) 小町谷操三「ヘリゲル君と弓」(『弓術』文庫版 所収)、六九―七〇頁。
- (21) 『弓術』文庫版、四六―四七頁。
- (22) 小町谷前掲書、九九頁。
- (23) 「座談会 阿波研造博士とその弟子オイゲン・ヘリゲル博士の事を小町谷博士に聞く―その三―」『弓道』、第一八三号、昭和四十年八月、四―七頁。
- (24) 『弓術』文庫版、四七―四八頁。
- (25) 小町谷前掲書、九八頁。
- (26) 小町谷前掲書、八六―八七頁。
- (27) 櫻井前掲書、六一―七頁。
- (28) 『弓術』文庫版、一三頁。
- (29) 小町谷が選択した「不動の中心」という概念は、弓道用語の「会」を指すものであると思われる。「会」は弓を引き絞った状態から、さらに左右に力を加えつつ発射の機を熟させる状態をいう。
- (30) 小町谷前掲書、八七―八八頁。
- (31) 『弓術』文庫版、四三頁。
- (32) 『弓と禪』、一二六―一二七頁。
- (33) 『弓と禪』、一二八―一二九頁。
- (34) 『弓と禪』、一四一―一四二頁。
- (35) 『弓と禪』、三七頁。
- (36) 西尾幹二『行為する思索』中央公論社、一九八二年、三二頁。
- (37) Feliks F. Hoff, Herrigel and the Consequences, 1. International Kyudo Symposium Proceedings, pp.25 - 35, Hamburg, 1994.
- (38) 『弓と禪』、三六頁。
- (39) 『弓と禪』、一六五頁。
- (40) 『弓術』文庫版、六一頁。
- (41) 『弓術』文庫版、九頁。
- (42) すでに見たように、日本の弓術には、歩射、騎射、堂射と、目的によって弓と矢の使用法が異なる。騎射は室町から江戸期に、堂射は幕末に中絶している。
- (43) 櫻井前掲書、二八三頁。
- (44) 『日置流弓目録』岡山大学附属図書館池田家文庫
- (45) 稲富栄次郎「ヘリゲル先生の想い出」(『弓と禪』所収)、一五頁。